

LiveUpdate 管理者ガイド

このマニュアルで説明するソフトウェアは、使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができます。

著作権

Copyright © 2002 Symantec Corporation. All Rights Reserved.

このマニュアルの一部または全部を許可なく複写することはできません。

商標

Symantec、Symantec ロゴ、Norton AntiVirus、LiveUpdate は Symantec Corporation の米国における登録商標です。

Symantec AntiVirus、Symantec Security Response、Symantec System Center は Symantec Corporation の商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT は Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。

その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

Printed in Ireland.

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

第 1 章	概要	
	LiveUpdate について	1-1
	LiveUpdate クライアントの働き	1-2
	LiveUpdate クライアントに関するファイル	1-3
	LiveUpdate クライアントに関するファイルの場所	1-4
	LiveUpdate クライアントの設定ファイル	1-5
	LiveUpdate 管理ユーティリティの働き	1-5
	LiveUpdate 管理ユーティリティに関するファイル	1-6
	LiveUpdate のアップグレード	1-8
	LiveUpdate 管理ユーティリティと	
	LiveUpdate クライアントの互換性	1-8
	LiveUpdate イン트라ネットサーバーのセットアップ	1-9
第 2 章	LiveUpdate 管理ユーティリティのインストール	
	LiveUpdate 管理ユーティリティのインストールと実行	2-1
	更新の取り込み処理について	2-2
	ダウンロードオプションの設定	2-2
	更新パッケージの取り込み	2-4
	ダウンロードの中断と再開の処理	2-4
第 3 章	LiveUpdate 管理ユーティリティの使い方	
	クライアントワークステーション用 LiveUpdate	
	ホストファイルの作成	3-1
	LiveUpdate の UNC サポート (LAN 転送) の設定	3-5
	LiveUpdate の UNC サポートの実装	3-6
	所在地による TCP/IP	3-7
	すべての接続オプションを利用可能にする設定	3-8
	LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント実行による	
	パッケージの取り込み	3-9
	LiveUpdate 管理ユーティリティの更新	3-9
	LiveUpdate クライアントの更新	3-10
	カスタム LiveUpdate パッケージの使い方	3-10
	LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルの使い方	3-12

第 4 章	SSC での LiveUpdate 管理ユーティリティの使い方	
	SSC で使うためのホストファイルの設定	4-1
	SSC からのクライアント更新の有効化とスケジュール設定 ...	4-2
	SSC からの NetWare サーバーの設定	4-3
	管理外クライアントのためのホストファイルの設定	4-4
	コマンドラインまたはスケジューラからの LiveUpdate の実行	4-5
第 5 章	LiveUpdate 管理ユーティリティのトラブルシューティング	
	LiveUpdate クライアントの設定ファイルの使い方	5-1
	Downloads フォルダ	5-2
	Product.Catalog.LiveUpdate	5-2
	Log.LiveUpdate	5-2
	Settings.LiveUpdate	5-3
	Corporate モードの設定について	5-10
	LiveUpdate 1.7 パッケージの認証について	5-10

索引

概要

この章では次の項目について説明します。

- LiveUpdate について
- LiveUpdate クライアントの働き
- LiveUpdate 管理ユーティリティの働き
- LiveUpdate のアップグレード
- LiveUpdate 管理ユーティリティと LiveUpdate クライアントの互換性
- LiveUpdate イン트라ネットサーバーのセットアップ

LiveUpdate について

LiveUpdate はコンピュータにインストール済みのシマンテック製品やウイルス定義ファイルを更新するシマンテック社の技術です。LiveUpdate は HTTP サイトまたは FTP サイトに接続することによってシマンテック社のサーバーに自動的に接続し、そこから更新済みファイルをダウンロードします。ウイルス定義とプログラムの更新ファイルをダウンロードするには有料購読が必要ですが、多くの企業向けの契約には更新権が付属しています。

シマンテック社は企業環境に特有の次の問題を解決するために企業内で使う LiveUpdate 管理ユーティリティ (LuAdmin) を開発しました。

- セキュリティ
LiveUpdate はシマンテック社のサーバーへの FTP 接続または HTTP 接続を確立します。場合によっては、この実装のためにファイアウォールソフトウェアを修正する必要があります。
- ネットワークトラフィック
多くのユーザーがネットワーク外に頻繁に接続するとトラフィックの問題が起きます。管理者が社内のサーバーを設定してユーザーがそ

これから更新ファイルをダウンロードすればトラフィックを緩和できます。

■ 管理

管理者はユーザーが利用できる更新ファイルについて管理しません。

このマニュアルでは、LiveUpdate の働きと環境に合わせてどう設定できるかについて説明します。

LiveUpdate クライアントの働き

起動すると LiveUpdate はコンピュータに登録済みのシマンテック製品のリストを表示して、更新する製品のバージョンと言語を設定します。次に LiveUpdate は必要な更新ファイルの種類と更新を適用する順序を決定します。

続いて LiveUpdate は LiveUpdate サーバーを見つけて接続します。このサーバーは社外のシマンテック社のサーバーであるか LiveUpdate 管理ユーティリティを使って管理者がセットアップした社内サーバーです。LiveUpdate は Livetri.zip という名前の ZIP ファイルをダウンロードして圧縮解除します。次に更新ファイルが必要であるかどうかの確認のために Livetri.zip 中の情報 (Liveupdt.tri) を調べます (図 1-1 を参照)。LiveUpdate は更新ファイルがあると判断するとダウンロードして適用します。

図 1-1 LiveUpdate の製品検索ウィンドウ



バージョン 1.6x 以降の LiveUpdate は最も近い社外の LiveUpdate ホストサーバーから更新ファイルをダウンロードできます。この結果、一般にダウンロード時間が短くなります。失敗する場合、LiveUpdate はシマンテック社の LiveUpdate サーバーの 1 つを自動的に使います。

バージョン 1.7x の LiveUpdate は追加の認証とエラーチェックを実行します。説明の警告とエラーメッセージが LiveUpdate の障害のトラブルシューティングを支援します。

[p.5-10の「LiveUpdate 1.7パッケージの認証について」](#)を参照してください。

LiveUpdate クライアントに関するファイル

LiveUpdate クライアントの働きに関するファイルを表 1-1 に示します。

表 1-1 LiveUpdate クライアントに関するファイル

ファイル	説明
Settings.Default.LiveUpdate	LiveUpdate クライアントの最初のデフォルト設定が入ったバックアップファイル。これは参照用のみのファイルです。
AUPDATE.EXE	自動 LiveUpdate 実行可能ファイル。このプログラムは製品またはウイルス定義の更新ファイルを自動的に取り込むために使われます。
LSETUP.EXE	LiveUpdate カスタムインストーラアプリケーション。
LUALL.EXE	すべての製品 UI を表示するメインの LiveUpdate 実行可能ファイル。このファイルはコマンドラインから実行できます。
LUALL.HLP	LiveUpdate ヘルプファイル。
LuComServer.EXE	LiveUpdate エンジンファイル。
LuComServerPS.DLL	LiveUpdate エンジンファイル。
ludirloc.dat	LiveUpdate 設定ファイルの最初の場所を格納する設定ファイル。このファイルは LiveUpdate 設定ファイルを見つけられない場合に後で LiveUpdate が参照することがあります。
LUINFO.INF	LiveUpdate でインストールされるファイルのリスト。このファイルは LiveUpdate インストーラが使います。
LUInit.exe	LiveUpdate インストーラファイル。

表 1-1 LiveUpdate クライアントに関するファイル

ファイル	説明
LUInit.ini	LiveUpdate インストーラファイル。
LUINSDLL.DLL	LiveUpdate インストーラファイル。
NDETECT.EXE	自動LiveUpdate実行可能ファイル。インターネット接続の存在を決定するために使われます。
NetDetectController.DLL	自動 LiveUpdate 実行可能ファイル。
ProductRegCom.DLL	LiveUpdate エンジンファイル。
README.TXT	最新の拡張機能、バグ修正、既知の問題など、更新された製品情報のテキストファイル。
S32LIVE1.DLL	LiveUpdate エンジンファイル。
S32LUCP1.CPL	LiveUpdate 制御パネルファイル。
S32LUIS1.DLL	LiveUpdate エンジンファイル。
S32LUWI1.DLL	LiveUpdate エンジンファイル。
SymantecRootInstaller.exe	シマンテック社のルート認証のコピーを、インターネットエクスプローラが使う予定の Microsoft 社の認証ストアにインストールするプログラム。

LiveUpdate クライアントに関するファイルの場所

バージョン 1.6x と 1.7x の LiveUpdate クライアントの場合、設定は読み取り専用ファイルとして LiveUpdate データフォルダに格納されます。LiveUpdate データフォルダの場所はオペレーティングシステムによって次のように変わります。

- (アップグレードではなく新規インストールの) Windows 2000 の場合は次の場所です。
C:\¥Documents And Settings¥All Users¥Application Data¥Symantec
- Windows 9x/Me の場合は次の場所です。
C:\¥Windows¥All Users¥Application Data¥Symantec
- Windows NT 4.0 の場合は次の場所です。
C:\¥WinNT¥Profiles¥All Users¥Application Data¥Symantec

必要に応じてフォルダとパスはインストール中に作成されます。ただし、Application Data フォルダがインストール時に存在する場合には Shfolder.dll で指定される場所が使われます。

メモ：異なるバージョンからオペレーティングシステムをアップグレードした場合、正しいフォルダは以前のオペレーティングシステムの場所になることがあります。

Shfolder.dll はインターネットエクスプローラ 5.0 以上で配布され、このファイルをインストールする再配布可能な Microsoft 更新プログラムが LiveUpdate のインストールに含まれます。

LiveUpdate のプログラムファイルは次の場所に格納されます。

Program Files¥Symantec¥LiveUpdate

LiveUpdate クライアントの設定ファイル

バージョン 1.6x 以降の LiveUpdate クライアントの設定情報は次のファイルにあります。

- Product.Catalog.LiveUpdate
- Log.LiveUpdate
- Settings.LiveUpdate

これらのファイルの場所は p.1-4 の「[LiveUpdate クライアントに関するファイルの場所](#)」で説明した Application Data¥Symantec ¥LiveUpdate フォルダです。これらのファイルの情報はメモ帳などのテキストエディタで表示して編集できます。

p.5-1 の「[LiveUpdate クライアントの設定ファイルの使い方](#)」を参照してください。

LiveUpdate 管理ユーティリティの働き

管理者は LiveUpdate 管理ユーティリティ (LuAdmin) を使ってイントラネットの HTTP サーバーか FTP サーバーを確立するか標準のファイルサーバーにディレクトリを用意してネットワークのための LiveUpdate の動作を制御できます。社内のサーバーに接続しているユーザーは社外のシマンテック社のサーバーに接続しなくてもそこから更新ファイルを取り込みます。社内ネットワークの LiveUpdate サーバーにユーザーが接続するようにして、管理者はネットワークトラフィックを減らし、転送速度を速め、そしてそれぞれのクライアントに送信されるウイルス定義の更新

ファイルのサイズを制限できます。LiveUpdate 管理ユーティリティはネットワークに Windows NT コンピュータがない場合または Windows NT コンピュータがインターネットに接続していない場合にも役立ちます。

メモ: Windows NT のサーバーやワークステーション用には安易に UNC パスを使わないでください。スケジュール設定ユーティリティを使う場合、すべてのユーザーがアクセスの権限を確認できる NT サーバー上の共有リソース (NULL シェア) の中に LiveUpdate ファイルがない限り LiveUpdate は UNC パスに接続できません。

LiveUpdate 1.6x と 1.7x でダウンロードとセキュリティの拡張機能を使うにはバージョン 1.5.3.21 以降の LiveUpdate 管理ユーティリティを使う必要があります。最新版の LuAdmin とサポートマニュアルと一緒にシマンテック社の次の Web サイトからダウンロードできます。

<http://www.symantec.com/region/jp/support/download.html>

LiveUpdate 管理ユーティリティに関するファイル

LiveUpdate 管理ユーティリティの働きに関するファイルを表 1-2 に示します。

表 1-2 LiveUpdate 管理ユーティリティに関するファイル

ファイル	説明
401comup.exe	LuAdmin.exe に必要な共通コントロール (Comctl32.dll) の更新ファイル。LuAdmin インストーラはこの更新ファイルが必要かどうかを検出します。インストーラが実行可能ファイルを LiveUpdate 管理インストールフォルダにコピーします。インストールは管理者が手動で行う必要があります。
ISLUA.DLL	カスタムインストールとアンインストールのライブラリ。
lua1d5.rtf	LiveUpdate 管理ユーティリティプログラムの最新リリースの新機能の説明が載っている書式付きテキストファイル。
LuAdmin.exe	LiveUpdate 管理ユーティリティプログラム。
luadmin.hst	更新パッケージをダウンロードするためのホストファイル。

表 1-2 LiveUpdate 管理ユーティリティに関するファイル

ファイル	説明
Lualog.xml	取り込み処理、カスタム更新のマージ、ホストファイルの暗号化 / 解読などのイベントのメッセージを記録するファイル。バックグラウンドとユーザーモードの両方のアプリケーションの実行を記録します。このファイルの内容は LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルビューアで表示できます。
luaupdat.exe	LiveUpdate 管理ユーティリティによって実行されます。実行されると LiveUpdate 管理ユーティリティを終了し、LiveUpdate を起動後、再度 LiveUpdate 管理ユーティリティを起動します。この処理によりコンピュータの再起動は必要なくなります。
products.xml	更新の取り込みウィンドウで選択した製品の動的なリストを格納するファイル。複数の製品ラインについて複数の言語を選択できるだけでなく、それらの製品ラインの中で特定の言語用の特定の製品を選択できます。シマンテック社のサーバーから LiveUpdate 管理ユーティリティがダウンロードを実行するたびに必要に応じて製品リストが更新されます。指定した LiveUpdate 管理ユーティリティの設定オプションも格納します。このファイルの内容は LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルビューアで表示できます。
README.TXT	マニュアルに載っていない LiveUpdate 管理ユーティリティの最新情報や技術上の問題を説明するテキストファイル。
S32luhl1.dll	FTP サーバーの代わりに UNC パスを使う場合にのみワークステーションに配布するファイル。
SAMPLE.HST	ワークステーション用にカスタマイズするホストファイル。
SilntLuA.exe	LiveUpdate 管理のサイレント実行プログラム。 p.3-9 の「LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント実行によるパッケージの取り込み」 を参照してください。
SYMZIP.DLL	LiveUpdate ZIP エンジン / 圧縮ライブラリ。

表 1-2 LiveUpdate 管理ユーティリティに関するファイル

ファイル	説明
Uninst.isu	LiveUpdate 管理ユーティリティをアンインストールするためのファイル。

デフォルトでは LiveUpdate 管理ユーティリティは Program Files¥LiveUpdate Administration フォルダにインストールされます。

LiveUpdate のアップグレード

バージョンが 1.6x よりも前の LiveUpdate の場合、設定はレジストリに格納されます。LiveUpdate 1.6 以降を以前のバージョンの LiveUpdate に上書きインストールした場合、レジストリの設定は Settings.LiveUpdate ファイルと Product.Catalog.LiveUpdate ファイルに移動します。HKLM¥Software¥Symantec¥LiveUpdate の下の設定は Settings.LiveUpdate ファイルの値に変換されますが、登録済みのシマンテック製品とパッチに関する情報は例外です。この情報は Product.Catalog.LiveUpdate ファイルに移動します。

以前から残っているホストファイル Liveupdt.hst は Settings.LiveUpdate ファイルの HOSTS¥プロパティツリーに変換されます。この変換の前に Liveupdt.hst ファイルの内容が以前のホスト情報を置き換えるように HOSTS¥プロパティツリーは削除されます。変換後、Liveupdt.hst ファイルは削除されます。

LiveUpdate 管理ユーティリティと LiveUpdate クライアントの互換性

LiveUpdate 1.6x 以降では設定ファイルの場所が変更されたため LiveUpdate クライアントコンピュータを管理する場合には正しいバージョンの LiveUpdate 管理ユーティリティを使うことが重要です。組み合わせる LiveUpdate 管理ユーティリティ (LuAdmin) と LiveUpdate クライアントのバージョンの一覧を表 1-3 に示します。

表 1-3 LiveUpdate のバージョンと互換性

LiveUpdate クライアント	LiveUpdate 管理ユーティリティ
LiveUpdate 1.5x	LuAdmin 1.5x
LiveUpdate 1.6x	LuAdmin 1.5.3.18 以降

表 1-3 LiveUpdate のバージョンと互換性

LiveUpdate クライアント	LiveUpdate 管理ユーティリティ
LiveUpdate 1.7x	LuAdmin 1.5.3.21 以降

LiveUpdate クライアント 1.7 の強化されたセキュリティ機能をフル活用するにはバージョン 1.5.3.21 以降の LuAdmin を使う必要があります。

LiveUpdate イン트라ネットサーバーのセットアップ

LiveUpdate イン트라ネットサーバーをセットアップするために管理者は次のタスクを完了する必要があります。

- LiveUpdate 管理ユーティリティをインストールして実行します。
p.2-1 の「[LiveUpdate 管理ユーティリティのインストールと実行](#)」を参照してください。
- ダウンロードする言語と製品を選択し、ダウンロードフォルダを指定します。
p.2-2 の「[ダウンロードオプションの設定](#)」を参照してください。
- カスタムホストファイル (Liveupdt.hst) を作成します。カスタムホストファイルは LiveUpdate 管理ユーティリティ (LuAdmin) を使ってクライアントコンピュータを社内サーバーに方向付けます。p.3-1 の「[クライアントワークステーション用 LiveUpdate ホストファイルの作成](#)」を参照してください。
- 任意の配布ツールを使って LiveUpdate 機能を使うすべてのワークステーションにホストファイル (Liveupdt.hst) を配布します。
- LiveUpdate 管理ユーティリティ (LuAdmin) を使ってシマンテック社のサイトから更新パッケージを社内サーバーにダウンロードします。
p.2-4 の「[更新パッケージの取り込み](#)」と p.3-9 の「[LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント実行によるパッケージの取り込み](#)」を参照してください。

LiveUpdate 管理ユーティリティのインストール

この章では次の項目について説明します。

- LiveUpdate 管理ユーティリティのインストールと実行
- 更新の取り込み処理について
- ダウンロードオプションの設定
- 更新パッケージの取り込み
- ダウンロードの中断と再開の処理

LiveUpdate 管理ユーティリティのインストールと実行

LiveUpdate 管理ユーティリティは自己解凍型の圧縮アーカイブ (Luau.exe) で多くのシマンテック製品に付属しています。最新版の LiveUpdate 管理ユーティリティのインストールファイルをシマンテック社の次の Web サイトからダウンロードすることもできます。

<http://www.symantec.com/region/jp/support/download.html>

LiveUpdate 管理ユーティリティをインストールするには

- ◆ Luau.exe を起動してから画面の指示に従って操作します。

LiveUpdate 管理ユーティリティを実行するには

- ◆ Windows スタートメニューで [プログラム (P)]、[LiveUpdate 管理ユーティリティ]、[LiveUpdate 管理ユーティリティ] の順に選択します。

更新の取り込み処理について

更新の取り込みウィンドウに表示される製品のリストは製品リストから動的に生成されます。このリストはダウンロードセッションの終わりごとにシマンテック社の LiveUpdate サーバーから自動的にダウンロードされます。これは更新ファイルの取り込みの有無にかかわらず起きます。

更新の取り込み処理中に次のような一連のイベントが起きます。

- 一時的なダウンロードフォルダが作成されます。
- 選択された製品に対して利用可能な更新ファイルが取り込まれ一時的なダウンロードフォルダに格納されます。
- インデックスファイルが更新されます。非互換の更新ファイルがあると削除されます。
- ダウンロードしたすべての製品の更新ファイルと更新済みインデックスファイルが一時的なダウンロードフォルダから指定されたダウンロードフォルダに移動します。
- 製品リストが更新されます。
- カスタム更新データがマージされます。
- デフォルトでは、インデックスファイルの中のダウンロードされなかったすべての更新ファイルが削除されます。
- ユーティリティが自己の更新ファイルの有無を調べます。

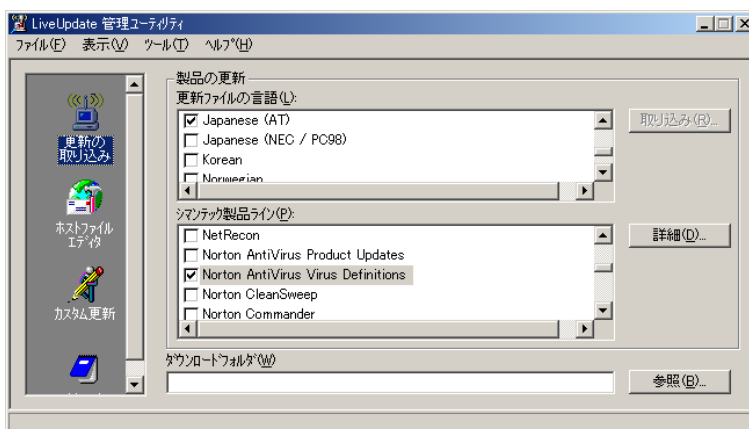
ダウンロードオプションの設定

ダウンロードオプションを設定するには LiveUpdate 管理ユーティリティを実行して、更新ファイルを入手したい製品と言語を選択します。ダウンロードフォルダを指定する必要もあります。ダウンロードフォルダは更新パッケージとサポートファイルのダウンロードが正常に完了した時点でファイルが格納される場所です。シマンテック社からダウンロードされたファイルはまず最初に LiveUpdate 管理ユーティリティが作成する一時フォルダに入り、完全にダウンロードが終わると指定されたダウンロードフォルダに移動します。

ダウンロードオプションを設定するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。

- 2 左ペインで [更新の取り込み] をクリックします。



- 3 [更新ファイルの言語 (L)] リストでダウンロードしたいパッケージの言語にチェックマークを付けます。

メモ: 日本版のパッケージをダウンロードする場合には [更新ファイルの言語 (L)] リストで [Japanese] を選択します。NEC コンピュータのユーザーは [Japanese (AT)] と [Japanese (NEC/PC98)] の両方のパッケージをダウンロードする必要があります。

- 4 [シマンテック製品ライン (P)] リストで次のいずれかの操作をします。
- 更新ファイルが必要なシマンテック製品ラインにチェックマークを付けます。

LiveUpdateを使うインストール済みのすべてのシマンテック製品はイントラネットサーバーに届くようになっているので、個々の製品ではなく完全な製品ラインをダウンロードしてください。

- 個々の製品コンポーネントを選択するために [シマンテック製品ライン (P)] リストで該当するチェックボックスにチェックマークを付けてから [詳細 (D)] をクリックし、表示される [更新ファイルの言語 (L)] と [製品ライン > 製品 (P)] の両方のリストでチェックボックスにチェックマークを付けます。

製品ラインではなく個々の製品コンポーネントをダウンロードするという選択をすると、他の利用可能な更新ファイルを手に入れないことがあります。たとえば、AntiVirus 製品用の新しいウイルス定義ファイルに必要なエンジンもシマンテック社のサーバーに用意されて利用できるようになっている場合があります。

- 5 [ダウンロードフォルダ (W)] で次のいずれかの操作をします。
 - 更新ファイルをダウンロードしたいフォルダのパスを入力します。
 - [参照 (B)] をクリックして希望するダウンロードフォルダを見つけます。

ダウンロードフォルダにはサーバー上の任意のフォルダまたは FTP サーバーか HTTP サーバーの上のフォルダを指定できます。

ダウンロードパッケージのほかに LiveUpdate 管理ユーティリティは Symtri.zip、Livetri.zip、Symtri16.zip というインデックスファイルと Products.xml をダウンロードします。これらのファイルは異なるバージョンの LiveUpdate に必要です。

更新パッケージの取り込み

製品の更新ファイルを選択してダウンロードフォルダを指定した後は更新パッケージの取り込みができます。

更新パッケージを取り込むには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [更新の取り込み] をクリックします。
- 3 更新パッケージのダウンロードを開始するために [取り込み (R)] をクリックします。
- 4 画面の指示に従って操作します。

メモ: 選択されたパッケージの一部のファイルを LiveUpdate 管理ユーティリティが正常にダウンロードできない場合、ダウンロードフォルダにパッケージは 1 つも入りません。ダウンロードの活動について詳しくはログファイルを参照してください。

ダウンロードの中断と再開の処理

LiveUpdate 管理ユーティリティはダウンロードの中断を認識します。ダウンロードの再開時にはアプリケーションの設定に変更がなかったと想定すると LiveUpdate 管理ユーティリティは中断した場所から再開し、両方のセッションでダウンロードしたパッケージを統合します。

ダウンロードが中断した場合にアプリケーションの設定（製品または言語など）に修正を加えると LiveUpdate 管理ユーティリティは前回の中断したセッションからキャッシュした不完全なダウンロードデータが現在

のセッションの一部であると想定します。これを避けるには、同じアプリケーション設定で再開するかキャッシュした不完全なダウンロードデータをProgram Files¥LiveUpdate Administration¥TEMPフォルダから削除する必要があります。

LiveUpdate 管理ユーティリティの使い方

この章では次の項目について説明します。

- クライアントワークステーション用 LiveUpdate ホストファイルの作成
- LiveUpdate の UNC サポート (LAN 転送) の設定
- LiveUpdate の UNC サポートの実装
- 所在地による TCP/IP
- すべての接続オプションを利用可能にする設定
- LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント実行によるパッケージの取り込み
- LiveUpdate 管理ユーティリティの更新
- LiveUpdate クライアントの更新
- カスタム LiveUpdate パッケージの使い方
- LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルの使い方

クライアントワークステーション用 LiveUpdate ホストファイルの作成

Liveupdt.hst はクライアントワークステーション上で LiveUpdate の動作を制御するホストファイルです。Liveupdt.hst の場所はクライアントにインストールされている LiveUpdate のバージョンによって異なります。バージョンが 1.6x より前の LiveUpdate の場合、Liveupdt.hst ファイルは

C:\¥Program Files¥Symantec¥LiveUpdate にあります。1.6x 以降の LiveUpdate の場合、Liveupdt.hst ファイルは読み取り後に削除されます。

ワークステーション上の既存の Liveupdt.hst を置換するために社内サーバーを指す新しいファイルを作成する必要があります。

LiveUpdate ホストファイルの作成

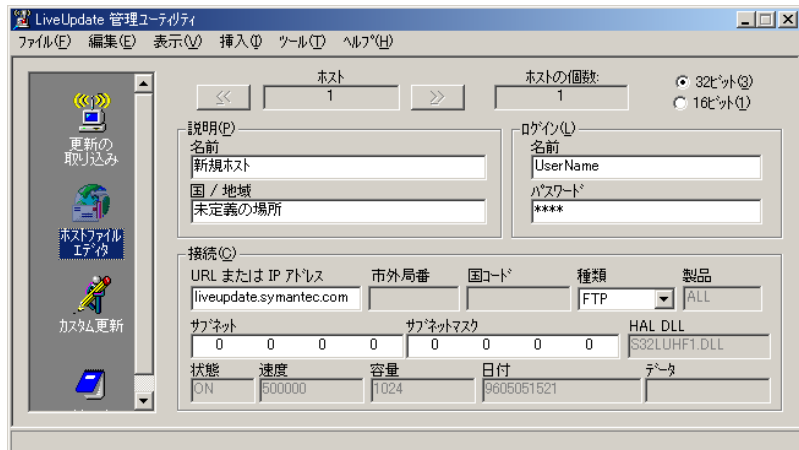
ホストファイル内では次の 3 種類のホストを作成できます。

- FTP (社内の FTP サーバーを使う場合)
- HTTP (社内の HTTP サーバーを使う場合)
- LAN (絶対パス付きで UNC フォルダまたは DOS ドライブを使う場合)

メモ: バージョンが 1.6x より前の LiveUpdate で HTTP と FTP の両方をサポートする場合にはホストファイル内のホストエントリの順序が重要です。これらの 2 つのホストの種類のうち最初に指定した方がデフォルトの接続の種類になります。

FTP 用の LiveUpdate ホストファイルを作成するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [ホストファイルエディタ] をクリックします。
- 3 ファイルメニューで [開く (O)] を選択します。
- 4 現在のフォルダにある SAMPLE.HST をダブルクリックします。



- 5 [説明 (P)] で次の操作をします。
 - ユーザーが社内サーバーに接続するときに表示したい名前を [名前] に入力します。
 - サーバーが置いてある国を [国 / 地域] に入力します。
- 6 [ログイン (L)] で次の操作をします。
 - FTP サーバーのユーザー名を [名前] に入力します。
すべてのユーザーが同じ名前を使います。
 - 指定したユーザー名のためのパスワードを [パスワード] に入力します。
- 7 [接続 (C)] で次の操作をします。
 - サーバーの IP アドレスまたは URL を [URL または IP アドレス] に入力します。
 - [種類] で [FTP] を選択します。
 - [サブネット] と [サブネットマスク] に 0.0.0.0 と入力します。
詳しくは [p.3-7 の「所在地による TCP/IP」](#) 参照してください。
- 8 次のいずれかを選択します。
 - [32 ビット (3)]
デフォルトで選択されています。32 ビット版をインストールすると LiveUpdate フォルダの中の DLL ファイルの名前は S32 で始まります。
 - [16 ビット (1)]
16 ビット版 LiveUpdate クライアント用のホストファイルを作成する場合には [16 ビット (1)] を選択します。16 ビット版 LiveUpdate をインストールすると LiveUpdate フォルダの中の DLL ファイルの名前は S16 で始まります。
16 ビットと 32 ビットのホストファイルに互換性はありません。
- 9 ファイルメニューで [名前を付けて保存 (A)] を選択します。
- 10 カスタマイズしたファイルを Liveupdtdt.hst として保存します。

HTTP 用の LiveUpdate ホストファイルを作成するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [ホストファイルエディタ] をクリックします。
- 3 ファイルメニューで [開く (O)] を選択します。

- 4 現在のフォルダにある SAMPLE.HST をダブルクリックします。
デフォルトでは [32 ビット (3)] が選択されています。HTTP ベースのホストは 16 ビットクライアントでは利用できません。[16 ビット (1)] を選択した場合にはユーティリティを使ってホストを FTP ホストに変換できます。[はい] をクリックするとホストを見直し必要に応じて修正する必要があります。
- 5 [説明 (P)] で次の操作をします。
 - ユーザーが社内サーバーに接続するときに表示したい名前を [名前] に入力します。
 - サーバーが置いてある国を [国 / 地域] に入力します。
- 6 [ログイン (L)] で次の操作をします。
 - HTTP サーバーのユーザー名を [名前] に入力します。
すべてのユーザーが同じ名前を使います。
 - 指定したユーザー名のためのパスワードを [パスワード] に入力します。
- 7 [接続 (C)] で次の操作をします。
 - サーバーの IP アドレスまたは URL を [URL または IP アドレス] に入力します。
 - [種類] で [HTTP] を選択します。
 - [サブネット] と [サブネットマスク] に 0.0.0.0 と入力します。
詳しくは [p.3-7 の「所在地による TCP/IP」](#) を参照してください。
- 8 ファイルメニューで [名前を付けて保存 (A)] を選択します。
- 9 カスタマイズしたファイルを Liveupdt.hst として保存します。

UNC フォルダ用の LiveUpdate ホストファイルを作成するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [ホストファイルエディタ] をクリックします。
- 3 ファイルメニューで [開く (O)] を選択します。
- 4 現在のフォルダにある SAMPLE.HST をダブルクリックします。
デフォルトでは [32 ビット (3)] が選択されています。LAN ベースのホストは 16 ビットクライアントでは利用できません。
- 5 [説明 (P)] で次の操作をします。
 - ユーザーが社内サーバーに接続するときに表示したい名前を [名前] に入力します。
 - サーバーが置いてある国を [国 / 地域] に入力します。

- 6 [ログイン (L)] で次の操作をします。
 - サーバーへのアクセス権のあるユーザーのユーザー名を [名前] に入力します。
このフィールドを空白のままにした場合、LiveUpdate はシステムにログインしたユーザーのユーザー名を使って接続を試みます。
 - ユーザー名に対応するパスワードを [パスワード] に入力します。
このフィールドを空白のままにした場合、LiveUpdate はシステムにログインしたユーザーのパスワードを使います。
- 7 [接続 (C)] で次の操作をします。
 - [種類] で [LAN] を選択します。
 - LiveUpdateパッケージが入っているサーバーフォルダの絶対パス付きでUNCパスまたはDOSドライブを[フォルダ]に入力します。
- 8 ファイルメニューで [名前を付けて保存 (A)] を選択します。
- 9 カスタマイズしたファイルを Liveupd.tst として保存します。

メモ : モデムサポートは LiveUpdate から削除されました。ただし、ユーザーインターフェースにそのオプションはまだ残っています。

LiveUpdate の UNC サポート (LAN 転送) の設定

LiveUpdate は HTTP サーバーまたは FTP サーバーを必要としないで UNC サポートによる社内サーバーからのパッケージのダウンロードをサポートします。UNC サポートは次の 2 つの要素で構成されます。

- UNC ダウンロードをサポートする LiveUpdate DLL (S32luh1.dll)
この DLL は LiveUpdate クライアントのバージョンが 1.6x より古い場合のみ必要です。
- 社内サーバーを指すように LiveUpdate 管理ユーティリティで作成したカスタムホストファイル

デフォルトでは UNC DLL が存在すればそれが排他的な転送機構になります。これにより、UNC パスを使う方がいいと管理者が判断した場合にはユーザーは FTP を使えなくなります。

Windows 95/98/NT 4.0 では LiveUpdate 1.4x 以降に LiveUpdate ウィザードの接続オプションの 1 つとして [ネットワーク] を含めることができます。

[ネットワーク] を接続オプションにするには

- ◆ 次のレジストリに All Transports Available という名前のエントリ（種類は DWORD）を追加します。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Symantec¥LiveUpdate¥Preference

このエントリを 0 以外にしたときに LiveUpdate フォルダに S32luhl1.dll が存在すると、[ネットワーク] が接続オプションとして利用可能です。

たとえば、この機能を使って社内の UNC パスのエントリとシマンテック社の FTP サーバーや HTTP サーバーのエントリをホストファイルに入れることができます。これはラップトップユーザーにとって理想的な設定です。

メモ: UNC サポートは 32 ビット版 LiveUpdate でのみ利用可能です。UNC の代わりに絶対パス付きで DOS ドライブを指定することもできます。

LiveUpdate の UNC サポートの実装

ホストファイルを作成したらそのホストファイルと UNC DLL (S32luhl1.dll) をクライアントコンピュータ上の LiveUpdate フォルダにコピーします。デフォルトの LiveUpdate フォルダは ¥Program Files¥Symantec¥LiveUpdate です。

LiveUpdate の UNC サポートを実装するには

- 1 新しい Liveupdt.hst ファイルを作成して配布します。
- 2 ワークステーションに S32luhl1.dll を配布します。このファイルは LiveUpdate Administration フォルダ（デフォルトは Program Files¥LiveUpdate Administration）にあります。
この DLL は LiveUpdate クライアントのバージョンが 1.6x より古い場合のみ必要です。
- 3 更新の取り込み用フォルダを作成します。
[p.3-9の「LiveUpdate管理ユーティリティのサイレント実行によるパッケージの取り込み」](#) を参照してください。

Windows NT サーバーに接続する Windows 9x/Me コンピュータには問題があります。Windows 9x/Me ユーザーにはリソースに対するアクセス権が必要です。NT のワークステーションとサーバーに UNC パスを使うことはお勧めしません。

LAN 接続では LiveUpdate はホストファイルに指定されたユーザー名とパスワードを無視します。すべてのユーザーがアクセスの権限を確認できるサーバー上に共有リソースを作成することが対策になります。

ネットワーク上の UNC パスに接続するワークステーションがある場合、ネットワークにログインしたユーザーにはネットワークリソースに対するアクセス権が必要です。ホストファイルに指定されたユーザー名とパスワードは無視されます。Windows NT サーバーでの 1 つの方法はすべてのユーザーがアクセスの権限を確認できる共有リソース (NULL シェア) を作成することです。NULL シェアの作成について詳しくは Microsoft Windows NT サーバーのマニュアルを参照してください。

所在地による TCP/IP

単一のホストファイルに複数のホストエントリを入れる場合または個々のクライアントコンピュータが IP アドレスに基づいて異なるサーバーにログインするようにしたい場合、ホストファイル内で所在地による TCP/IP を有効にする必要があります。そのためには有効なサブネットとサブネットマスクの両方を入力する必要があります。そうでない場合には両方の設定にすべて 0 を入力します。

LiveUpdate はホストエントリのサブネットマスクをクライアントワークステーションの IP アドレスに適用してから結果の IP アドレスと同じホストエントリのサブネットの照合を試みます。マスクした IP アドレスとサブネットが一致すると LiveUpdate は特定のホストを使ってそのホストの中で定義済みの LiveUpdate サーバーにアクセスします。

サブネットマスクを適用した IP アドレスが同じホストエントリの中で定義済みのサブネットに一致しないと LiveUpdate は次のホストエントリに進んで同じ処理を繰り返します。

サンプルホスト設定

クライアントワークステーションのサンプルホスト設定を表 3-1 に示します。

表 3-1 サンプルホスト設定

オプション	入力内容
ホストエントリ URL/IP	myserver.liveupdate.com
ホストエントリサブネット	155.64.159.0
ホストエントリサブネットマスク	255.255.255.0
クライアントワークステーションの IP アドレス	155.64.159.20

上のクライアントワークステーションの IP アドレスにこのサブネットマスクを適用すると 155.64.159.0 になります。これはホストエントリのサブネットと照合されます。これらの IP アドレスが同一なので LiveUpdate はこのホストを使って指定された LiveUpdate サーバーに接続します。

クライアントワークステーションの IP アドレスが 155.64.155.80 の場合に上のサブネットマスクを適用すると（結果は 155.64.155.0 になって）サブネットと結果のマスクした IP アドレスは一致しないので、LiveUpdate は次のホストエントリに進んで同じ処理を繰り返します。一致するホストエントリが見つからないと LiveUpdate セッションは失敗します。サブネットまたはサブネットマスクの情報が入っていないデフォルトのホストエントリをホストファイルの最後のエントリとして登録しておくことをお勧めします。

すべての接続オプションを利用可能にする設定

通常、S32luhl1.dll がワークステーション上の LiveUpdate フォルダにある場合には [ネットワーク] が唯一の利用可能な接続オプションです。最新版の LiveUpdate ではすべての接続オプションを利用可能にできます。これはラップトップユーザーにとって実用的です。たとえば、ラップトップ上のホストファイルに社内の UNC パスのエントリとシマンテック社の FTP サーバーやモデムサーバーのエントリが入っているような場合です。

すべての接続オプションを利用可能にするには

- ◆ 次のレジストリに All Transports Available という名前のエントリ（種類は DWORD）を追加します。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Symantec¥LiveUpdate¥Preference

このエントリを 0 にしたときに LiveUpdate フォルダに S32luhl1.dll が存在すると、[ネットワーク] オプションのみが利用可能です。

このエントリを 0 以外にしたときに LiveUpdate フォルダに S32luhl1.dll が存在すると、すべての接続オプションが利用可能です。

LiveUpdate クライアントのバージョンが 1.5x では、LiveUpdate フォルダに S32luhl1.dll が存在しない場合には [インターネット] オプションのみが利用可能です。

LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント実行によるパッケージの取り込み

LiveUpdate 管理ユーティリティをサイレント実行するとスケジュール設定した LiveUpdate 管理ユーティリティセッションでユーザーの操作なしに必要なすべてのパッケージを自動的に取り込みます。

LiveUpdate 管理ユーティリティをサイレント実行するには、その前に LiveUpdate 管理ユーティリティを実行してサポートする製品、言語、ダウンロードフォルダを選択する必要があります。LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント実行が終了すると設定が保存され、以降のサイレント実行のたびにその設定が使われます。

LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント実行によりパッケージを自動的に取り込むには

- ◆ 次のいずれかの操作をします。
 - SilntLuA.exe を実行します。
デフォルトではこのプログラムは ¥Program Files¥LiveUpdate Administration¥ にあります。
 - LuAdmin.exe /SILENT を実行します。

LiveUpdate 管理ユーティリティの更新

LiveUpdate 管理ユーティリティは自己を更新できます。LiveUpdate 管理ユーティリティはパッケージのダウンロードを完了すると自動的に LiveUpdate 管理ユーティリティの新しい更新ファイルがあるかどうかを調べます。

LiveUpdate 管理ユーティリティを更新するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 ツールメニューで [LiveUpdate 管理ユーティリティの更新 (U)] を選択します。
- 3 [LiveUpdate] ダイアログボックスで [次へ (N)] をクリックして、どの更新ファイルがあるかを確認します。
- 4 [完了] をクリックして更新を完了します。

メモ : LiveUpdate 管理ユーティリティは自己の更新ファイルを取り込んでインストールする間は一時的にシャットダウンします。

LiveUpdate クライアントの更新

最新の LiveUpdate クライアントセットアップファイルは次のいずれかの方法でダウンロードできます。

- 次に示すシマンテック社の Web サイトから Lusetup.exe をダウンロードします。
<http://www.symantec.com/region/jp/support/download.html>
- LiveUpdate 管理ユーティリティを使ってクライアントをダウンロードします。
社内 LiveUpdate サーバーにダウンロードすると LiveUpdate クライアントが各自のワークステーションを社内サーバーから直接更新できます。

手動でインストーラを実行するときはサイレント実行できます。サイレント実行するにはコマンド `Lusetup /s /a /q` を使います。

メモ : 1.6x より前のバージョンで LiveUpdate インストーラをサイレント実行するにはコマンド `Lusetup /s` を使います。

Lusetup によるインストールのログファイルを作成するにはコマンド `Lusetup /a /log` を使います。これにより `Luinstall.log` という名前のログファイルが Windows フォルダに作成されます。

インストーラに入っている LiveUpdate のバージョンを確認するには次のサイトで入手可能な `Lusetup.txt` に表示される日付を調べます。

<http://www.symantec.com/region/jp/support/download.html>

カスタム LiveUpdate パッケージの使い方

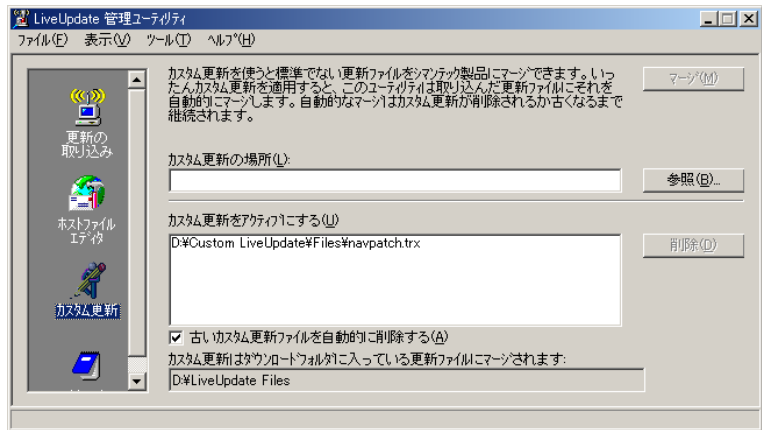
シマンテック社のテクニカルサポートまたはシマンテック・セキュリティ・レスポンス (Symantec Security Response) は必要に応じてユーザーにカスタム更新ファイルを提供します。通常、この更新ファイル (.trx) はシマンテック製品を使うユーザーの特別な状況または特定の要求に対処するために使います。たとえば、新種のウイルスを検出して除去するウイルス定義が LiveUpdate 実働サーバーにまだ用意されていなくても、更新ファイルには入っていることがあります。

LiveUpdate 管理ユーティリティをインストールしてあるコンピュータに .trx ファイルをコピーします。カスタム更新ファイルを受信したらその

ファイルを LiveUpdate 定義の最新の更新ファイルにマージします。次回クライアントが LiveUpdate を実行したときにマージ済み更新ファイルが配信されます。

カスタム LiveUpdate パッケージを使うには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [カスタム更新] をクリックします。
- 3 [カスタム更新の場所 (L)] テキストボックスにシマンテック社から受信したカスタム更新ファイルがあるコンピュータ上の場所を入力します。



- 4 [マージ (M)] をクリックします。
 LiveUpdate 管理ユーティリティはカスタム更新ファイルと最新の LiveUpdate ウイルス定義の日付を比較して必要に応じてファイルをマージします。[カスタム更新をアクティブにする (U)] ボックスに LiveUpdate 管理ユーティリティが適用する最新のカスタム更新ファイルのリストが示されます。
- 5 必要がなくなったカスタム更新ファイルを自動的に削除したい場合には [古いカスタム更新ファイルを自動的に削除する (A)] にチェックマークを付けます。

LiveUpdate 管理ユーティリティは LiveUpdate サーバーからの LiveUpdate ウイルス定義ファイルのダウンロード時に日付を比較して古いカスタム更新パッケージを削除します。

LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルの使い方

LiveUpdate 管理ユーティリティにはイベントログがあります。このログには次のようなイベントが記録されます。

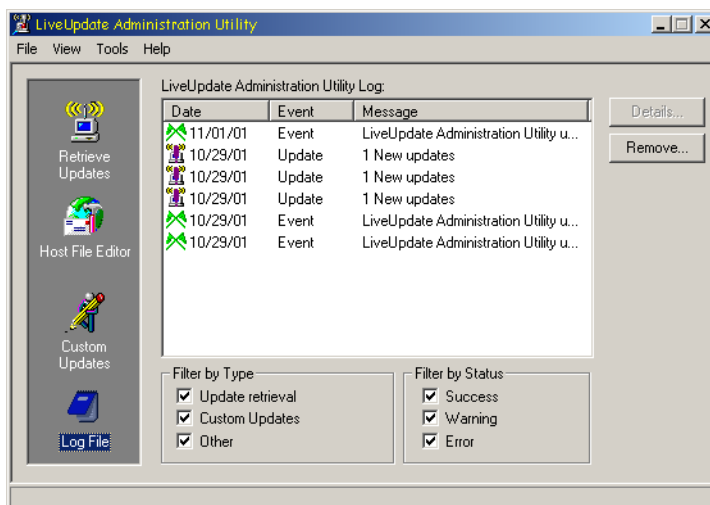
- 取り込み処理（サイレント更新など）
- カスタム更新ファイルのマージ
- ホストファイルの暗号化と解読

LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルを使う

ログファイルのイベントは表示または削除できます。

LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルを表示するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [ログファイル] をクリックします。



- 3 [種類によるフィルタ] と [状態によるフィルタ] でイベントを限定するために適切なチェックボックスにチェックマークを付けます。

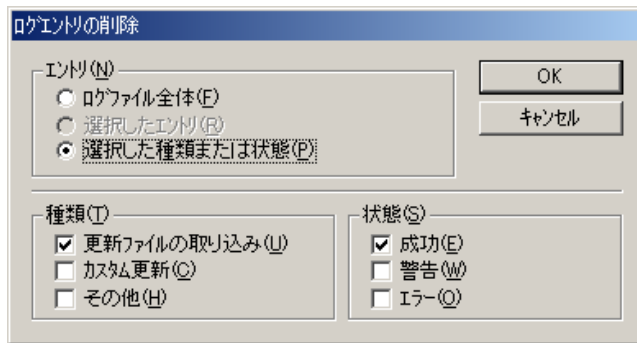
LiveUpdate 管理ユーティリティのログファイルを削除するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [ログファイル] をクリックします。

- 3 右ペインで次のいずれかの操作をします。
 - [LiveUpdate 管理ユーティリティログ]で削除したい1つ以上のイベントを選択し、[削除 (R)] をクリックしてから [OK] をクリックします。
 - [削除 (R)] をクリックし、すべてのイベントを削除するか、種類または状態に基づいてイベントを削除するかを選択してから [OK] をクリックします。

種類または状態に基づいてイベントを削除するには

- 1 LiveUpdate 管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [ログファイル] をクリックします。
- 3 右ペインで [削除 (R)] をクリックします。
- 4 ログエントリの削除ウィンドウで [選択した種類または状態 (P)] を選択します。
- 5 削除するエントリの種類と状態のチェックボックスにチェックマークを付けます。



- 6 [OK] をクリックします。

SSC での LiveUpdate 管理 ユーティリティの使い方

この章では次の項目について説明します。

- SSC で使うためのホストファイルの設定
- SSC からの NetWare サーバーの設定
- 管理外クライアントのためのホストファイルの設定
- コマンドラインまたはスケジューラからの LiveUpdate の実行

SSC で使うためのホストファイルの設定

管理クライアントと SAVCE NT/2000 サーバーは SSC (Smantec System Center の略) の LiveUpdate 設定を自動的に受信できます。これは社内 LiveUpdate サーバーに接続して更新ファイルをダウンロードできるようにします。ホストファイルを設定した後は新しい Grc.dat を生成し、定時更新を実行するために LiveUpdate を有効にする必要があります。

SSC で使うためのホストファイルを設定するには

- 1 SSC を開きます。
- 2 次のいずれかの操作をします。
 - 親サーバーを右クリックしてから [すべてのタスク (K)] を選択します。
 - サーバーグループフォルダを右クリックしてから [すべてのタスク (K)]、[LiveUpdate]、[設定] の順に選択します。
これはサーバーグループの中のすべてのサーバーとクライアントにホストファイルを設定し、同じ設定を共有できるようにします。

- 3 [LiveUpdate] ページで [社内 LiveUpdate サーバー (I)] を選択します。
- 4 サーバーの名前を入力します。
[説明] のフィールドは省略可能です。[ログイン] の [名前] フィールドと [パスワード] フィールドは FTP サーバーまたは HTTP サーバーにのみ使われ、共有フォルダには使われません。FTP サーバーまたは HTTP サーバーを使っている場合には適切なデータを入力します。
- 5 [接続] で共有フォルダの UNC パスを入力するか、FTP サーバーまたは HTTP サーバーの URL または IP アドレスを入力します。
- 6 [種類] で次のいずれかを選択します。
 - [FTP]
 - [HTTP]
 - [LAN]
- 7 必要に応じて [グループ外のクライアントに属性を適用する (C)] のチェックマークをはずします。
- 8 [適用 (A)] をクリックします。
- 9 [OK] をクリックします。
- 10 複数の親サーバーがある場合には各ステップがサーバーグループレベルで実行されない限り、すべてのクライアントとサーバーが変更を受信するように親サーバーごとにステップ 1～9 を繰り返します。

場合によってはクライアントが変更を受信する前に新しいバージョンの設定ファイル (Grc.dat) を生成する必要があります。

新しい Grc.dat ファイルを生成するには

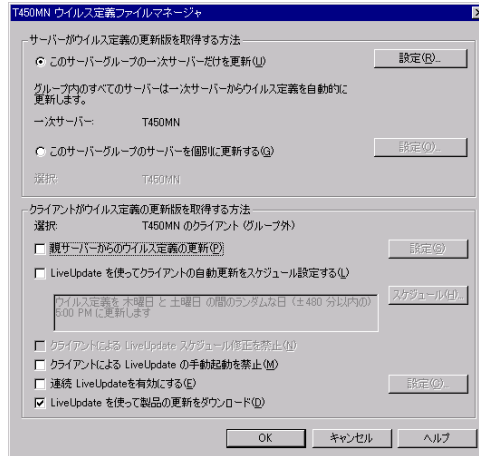
- ◆ 次のいずれかの操作をします。
 - SSC 内でクライアントリアルタイム保護オプションを変更してから [すべてをリセット (S)] をクリックし、オプションを元の設定に変更できます。
 - サーバーのウイルス定義を更新します。
 - 親サーバーで Symantec AntiVirus Server サービスを停止してから再開します。NetWare サーバーの場合は Vpstart.nlm をロード解除してから再ロードします。

SSC からのクライアント更新の有効化とスケジュール設定

新しいホストファイルを作成して新しい Grc.dat を生成した後はクライアントの定時更新を実行するために LiveUpdate を有効にする必要があります。

クライアント更新を有効にしてスケジュール設定するには

- 1 親サーバーを右クリックしてから [すべてのタスク (K)]、[Symantec AntiVirus]、[ウイルス定義ファイルマネージャ] の順に選択します。
- 2 [クライアントがウイルス定義の更新版を取得する方法] で [親サーバーからのウイルス定義の更新 (P)] のチェックマークをはずします。



- 3 [LiveUpdate を使ってクライアントの自動更新をスケジュール設定する (L)] にチェックマークを付けます。
- 4 頻度と時刻を指定するために [スケジュール (H)] をクリックします。
- 5 変更内容を保存してウイルス定義ファイルマネージャを終了するために [OK] をクリックします。

SSC からの NetWare サーバーの設定

LiveUpdate 管理ユーティリティは NetWare SAVCE サーバー用の更新版は取り込みません。FTP サーバーのためのこれらの更新ファイルを次の FTP サイトからダウンロードできます。

```
ftp://ftp.symantec.com/public/english_us_canada/antivirus_definitions/norton_antivirus/vpcur.lst
```

```
ftp://ftp.symantec.com/public/english_us_canada/antivirus_definitions/norton_antivirus/navup.exe
```

同じファイルは次のサイトにも用意されています。

```
ftp://ftp.symantec.com/public/english_us_canada/antivirus_definitions/norton_antivirus_corp/
```

SSCからNetWareサーバーを設定するには

- 1 NetWareサーバーを右クリックしてから [すべてのタスク(K)]、[Symantec AntiVirus]、[ウイルス定義ファイルマネージャ] の順に選択します。
- 2 [設定(R)] をクリックします。
- 3 [更新元(S)] をクリックします。
- 4 リストボックスから [LiveUpdate(Win32)/FTP(NetWare)] を選択します。
- 5 [設定(C)] をクリックします。
- 6 FTPの設定ウィンドウで社内LiveUpdateサーバーにアクセスするために必要なFTP情報を入力します。
- 7 変更内容を保存してウイルス定義ファイルマネージャを終了するために [OK] をクリックします。

メモ: NetWareサーバーが社内LiveUpdateサーバーから定義をダウンロードするには正しくTCP/IPとFTPを使うようにNetWareサーバーを設定する必要があります。

管理外クライアントのためのホストファイルの設定

管理外クライアントがある場合またはSSCを使っていない場合には新しいホストファイルを作成してそれをクライアントに配布する必要があります。

管理外クライアントのためのホストファイルを設定するには

- 1 LiveUpdate管理ユーティリティを実行します。
- 2 左ペインで [ホストファイルエディタ] をクリックします。
- 3 ファイルメニューで [新規作成(N)] を選択します。
- 4 サーバーの情報を入力します。
[説明(P)] のフィールドは省略可能です。[ログイン(L)] の [名前] フィールドと [パスワード] フィールドはFTPサーバーまたはHTTPサーバーにのみ使われ、共有フォルダには使われません。FTPサーバーまたはHTTPサーバーを使っている場合には適切なデータを入力します。

- 5 [接続] で共有フォルダの UNC パスを入力するか、FTP サーバーまたは HTTP サーバーの URL または IP アドレスを入力します。
- 6 [種類] で次のいずれかを選択します。
 - [LAN]
 - [FTP]
 - [HTTP]
- 7 ファイルメニューで [名前を付けて保存 (A)] を選択します。
- 8 ファイル名に `Liveupdt.hst` と入力します。
ファイルはデスクトップまたは簡単に見つけられる場所に保存します。
Liveupdt.hst ファイルを LiveUpdate 管理ユーティリティコンピュータ上の `¥Program Files¥Symantec¥Liveupdate` フォルダには保存しないでください。
- 9 作成した Liveupdt.hst ファイルを各クライアント上の `C:¥Program Files¥Symantec¥LiveUpdate` フォルダにコピーします。
- 10 まだ存在しなければ `S32luhl1.dll` ファイルをすべてのクライアント上で同じフォルダにコピーします。
このファイルは LiveUpdate 管理ユーティリティがインストールされたコンピュータのフォルダにあります。
デフォルトは `C:¥Program Files¥LiveUpdate Administration` です。
ただし、LiveUpdate クライアントのバージョンが 1.6x 以降の場合、このファイルをコピーする必要はありません。

LiveUpdate はクライアントコンピュータ上で起動すると社内の LiveUpdate サーバーから更新版を取り込みます。

コマンドラインまたはスケジューラからの LiveUpdate の実行

Symantec AntiVirus Corporate Edition 8.0 クライアントのサイレント LiveUpdate セッションは Windows NT/2000/XP でコマンドラインまたはスケジューラから実行できます。

コマンドラインまたはスケジューラから LiveUpdate を実行するには

- ◆ 次のパラメータを付けて `vpdn_lu.exe` と入力します。
 - `/s` サイレントモードでウイルス定義と製品の更新ファイルを取り込みます。
 - `/fUpdate` 製品の更新ファイルを除外します。

- /fVirusDef ウイルス定義の更新ファイルを除外します。

たとえば、次のように入力します。

- `vpdn_lu.exe /fUpdate /s`
ウイルス定義をサイレントに取り込みます。
- `vpdn_lu.exe /fVirusdef /s`
製品の更新ファイルをサイレントに取り込みます。
- `vpdn_lu.exe /s`
製品の更新ファイルとウイルス定義をサイレントに取り込みます。

メモ: LiveUpdateはサイレントモードの実行時にはエラーメッセージを表示しません。LiveUpdate が失敗しても通知されません。

LiveUpdate 管理ユーティリティのトラブルシューティング

この章では次の項目について説明します。

- [LiveUpdate クライアントの設定ファイルの使い方](#)
- [Corporate モードの設定について](#)
- [LiveUpdate 1.7 パッケージの認証について](#)

LiveUpdate クライアントの設定ファイルの使い方

バージョン 1.6x 以降の LiveUpdate クライアントの設定情報は Application Data¥Symantec¥LiveUpdate フォルダの次のファイルにあります。

- Product.Catalog.LiveUpdate
- Log.LiveUpdate
- Settings.LiveUpdate

Product.Catalog.LiveUpdate、Log.LiveUpdate、Settings.LiveUpdate の各ファイルは 10 個までバックアップファイルが維持されます。各ファイルは上書きすると古いファイルにバックアップの回数を示す番号が前に付いた名前で作成されます。たとえば、2.Settings.LiveUpdate は Settings.LiveUpdate ファイルの 2 回目のバックアップファイルです。バックアップファイルの個数が 10 を越えると最も古いバックアップファイルが削除されます。維持するバックアップファイルの個数は Settings.LiveUpdate ファイルの Preferences セクションで設定できます。

これらのファイルにある情報に基づいて LiveUpdate のダウンロードが失敗した原因を調べたり、LiveUpdate クライアント設定を検証したりできます。

Downloads フォルダ

Application Data¥Symantec¥LiveUpdate¥Downloads フォルダにはダウンロードした LiveUpdate パッケージが入っており、これらのパッケージは別々のフォルダに圧縮解除されて適用されます。Livetri.zip と部分ダウンロードファイルの場合を除いてこのフォルダは LiveUpdate セッションが正常に終了するたびに消去されます。

LiveUpdate セッションが正常に完了しなかった場合に LiveUpdate 接続で HTTP を使っているときは、このフォルダにある情報を使ってダウンロードの再開を試みます。

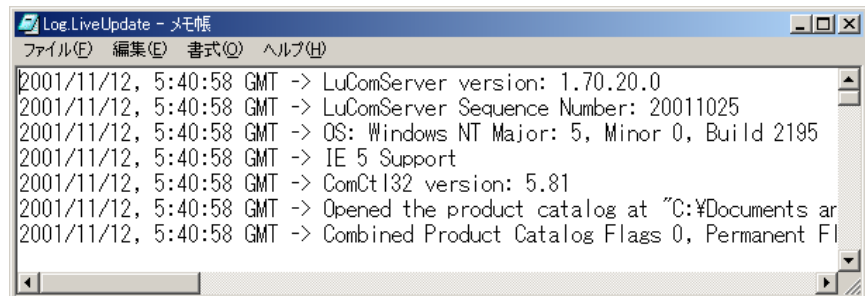
Product.Catalog.LiveUpdate

Product.Catalog.LiveUpdate ファイルはコンピュータにインストールされているシマンテック製品と各製品の最新のパッチレベルを示すために LiveUpdate の内部で使います。このファイルは編集しないでください。

Log.LiveUpdate

LiveUpdate を実行すると必ず Log.LiveUpdate というログファイルが作成されます。ログファイルはトラブルシューティングに役立てるために 10 個までバックアップファイルが維持されます。ログファイルは Application Data¥Symantec¥LiveUpdate フォルダにあります。各ログの最初にあるのは実行中の LiveUpdate のバージョンと LiveUpdate を実行しているコンピュータについての情報です。ログ記録はデフォルトで有効です。ログファイルは図 5-1 のようにメモ帳などのテキストエディタを使って開くことができます。

図 5-1 Log.LiveUpdate ファイル



Settings.LiveUpdate

Settings.LiveUpdate にはダウンロードの再開情報、ホストエントリ、マー
 ジインジケータなど、すべての LiveUpdate 設定が入っています。表 5-1
 に設定可能なエントリとその使い方の説明を示します。

表 5-1 Settings.LiveUpdate の設定

設定	説明
INSTALL_FOLDER	LiveUpdate をインストールした場所を示します。
SETTINGS_FILE	Settings.LiveUpdate ファイル（デフォルトでは ¥Application Data¥Symantec¥LiveUpdate フォルダ） の絶対パスです。
MERGE_FILE_LOCATION	LiveUpdate.Settings.Merge ファイルを検索する場所 の絶対パスです。この設定には LiveUpdate.Settings.Merge ファイルを検索するフォ ルダを指定することも、使いたい絶対パスとファ イル名を指定することもできます。この設定が存 在しないか空の場合には INSTALL_FOLDER 設定の 値が示す場所でファイルが検索されます。 Settings.LiveUpdate ファイルの通常のロード後に LiveUpdate.Settings.Merge ファイルが存在するとそ の内容がデフォルト設定を上書きしてロードされ ます。ロード後にこのマージファイルは削除され ます。設定を保存するとマージファイルの変更内 容がデフォルト設定として保存されます。
MERGE_FILE_NO_DELETE	マージファイルを処理後に削除するかどうかを制 御します。デフォルトでは（この設定が存在しない か空の場合に）マージファイルは見つかってロード されるとその後で削除されます。このプロパティを 空以外の値に設定するとファイルはロード後に削 除されません。こうすると、設定が指しているネッ トワーク上の共有ファイルを LiveUpdate の実行のた びにすべてのユーザーが全般設定のマージファイ ルとして使う場合に役立ちます。

表 5-1 Settings.LiveUpdate の設定

設定	説明
NEW_HOSTS_LOCATION	<p>テキスト設定形式のホスト仕様が入っているファイルの絶対パスまたはLiveUpdate.Settings.Hostsという(テキスト設定形式のホスト仕様が入っている)ファイルを検索するフォルダのパスです。このプロパティが存在しないか空の場合にはINSTALL_FOLDERが示す場所でLiveUpdate.Settings.Hostsファイルが検索されます。設定が通常どおりロードされた後でこのファイルがあるかどうかを検査されます。このファイルが見つかりと既存のホストは設定から削除され、新しいホストファイルの内容がホスト仕様としてロードされます。</p>
NEW_HOSTS_NO_DELETE	<p>新しいホストファイルを処理後に削除するかどうかを制御します。デフォルトでは(この設定が存在しないか空の場合に)ホストファイルは見つかってロードされるとその後で削除されます。このプロパティを空以外の値に設定するとファイルはロード後に削除されません。こうすると、設定が指しているネットワーク上の共有ファイルをLiveUpdateの実行のたびにすべてのユーザーが全般の新しいホストファイルとして使う場合に役立ちます。</p>
PRODUCT_CATALOG_FILE	<p>Product.Catalog.LiveUpdate ファイル (デフォルトでは¥Application Data¥Symantec¥LiveUpdate フォルダ)の絶対パスです。</p>
PER_USER_FOLDER	<p>Shfolder.dllから戻ったときのPer Userフォルダです。</p>
PER_USER_ROAMING_FOLDER	<p>Shfolder.dll から戻ったときの Per User Roaming フォルダです。</p>
PER_MACHINE_FOLDER	<p>Shfolder.dll から戻ったときの Per Machine フォルダです。このフォルダの場所はインストールされているオペレーティングシステムによって異なります。</p>

表 5-1 Settings.LiveUpdate の設定

設定	説明
DOWNLOADS	<p>ダウンロードの再開情報を格納します。HTTP を使ってダウンロードした各ファイルはそのオブジェクト名に従った設定をここで取得し、その後に設定名が続きます。Livetri.zip ファイルは新しいダウンロードが必要かどうかの確認のために必ず検査されるので、その設定がこのキーの下に常にあります。その他のファイル情報はファイルが正常にダウンロードされるまで維持されます。正常にダウンロードできない場合にはこの情報をダウンロードの再開に使えますが、更新ファイルをダウンロードするために使うプロトコルが HTTP の場合にのみ利用可能です。DOWNLOADS エントリの例を次に示します。</p> <pre> DOWNLOADS¥LIVETRI.ZIP¥CONTENT- LENGTH=676DOWNLOADS¥LIVETRI.ZIP¥LAST- MODIFIED= Tue, 28 Dec 1999 04:44:04 GMTDOWNLOADS¥LIVETRI.ZIP¥LOCALPATH=C:¥ WINNT¥Profiles¥All Users¥Application Data¥Symantec¥LiveUpdate¥Downloads¥livetri.zipDO WNLOADS¥LIVETRI.ZIP¥SERVER=ussm- greendude.symantec.comDOWNLOADS¥LIVETRI.ZIP ¥SERVERPATH=/liveupdate2/ livetri.zipDOWNLOADS¥LIVETRI.ZIP¥STATUS=Com plete </pre>
PREFERENCES	一般設定です。
WORKINGDIRECTORY	ダウンロードの再開とファイルの通常のダウンロードのときに一時ファイルを格納する場所を指定します。
USEPASSIVEFTPMODE	LiveUpdate をパッシブ FTP モード（新規インストールのデフォルト設定）に切り替えます。一部のファイアウォール設定ではパッシブ FTP の方がうまく処理できます。この値が 0 以外の場合には LiveUpdate はパッシブ FTP を使います。この値が 0 が存在しない場合には LiveUpdate はアクティブ FTP を使います。

表 5-1 Settings.LiveUpdate の設定

設定	説明
ALL_TRANSPORTS_AVAILABLE	LAN HAL DLL が存在する場合に LAN/UNC ホストを許可するためだけにデフォルトルールを無効にできるようにします。LAN HAL はもう存在しません。旧バージョンからの変換時に以前の LAN HAL が検出されると PREFERENCES_LAN_HAL_PRESENT 設定が作成されます。この設定の値は偽の場合は 0、真の場合は 1 です。
LAN_HAL_PRESENT	この設定は旧バージョンの LiveUpdate からの変換時にインストール中に作成されます。企業環境で古いバージョンの LuAdmin を使うクライアントコンピュータに配布した LAN HAL が検出された場合も作成されます。S32luhl1.dll がインストールフォルダで見つかりるとこの設定が作成されます。検査対象は空以外の値なのでこの設定の値は重要ではありません。
NON_SYMANTEC_HOST	この設定はプロパティ IS_SYMANTEC=NO を含むホストエントリが 1 つでもあれば作成されます。ホスト情報が (任意のロード元から) ロードされると必ずこの設定が検査されます。この設定を使って Corporate モードを検出します。
LOGEVENTS	0 以外の場合には PREFERENCES_LOG_FILE_NAME 設定が示すファイルにイベントのログが記録されます。
LOG_BACKUPCOUNT	0 以外の場合には順繰りに維持されるログファイルのバックアップの個数を指定します。新しいログファイルを作成するたびに既存のログファイルの番号が増えていき、最も古いログファイル (番号が最も大きいファイル) が削除されます。デフォルトは 10 です。
PRODUCT_CATALOG_BACKUPCOUNT	0 以外の場合には順繰りに維持される Product.Catalog.LiveUpdate ファイルのバックアップの個数を指定します。新しい Product.Catalog.LiveUpdate ファイルを保存するたびに既存のバックアップファイルの番号が増えていき、最も古いバックアップファイル (番号が最も大きいファイル) が削除されます。デフォルトは 10 です。

表 5-1 Settings.LiveUpdate の設定

設定	説明
SETTINGS_FILE_BACKUPCOUNT	0 以外の場合には順繰りに維持される Settings.LiveUpdate ファイルのバックアップの個数を指定します。新しい Settings.LiveUpdate ファイルを保存するたびに既存のバックアップファイルの番号が増えていき、最も古いバックアップファイル（番号が最も大きいファイル）が削除されます。デフォルトは 10 です。
LOG_FILE_NAME	ログファイルの絶対パスです。LOGEVENTS がオンの場合にはこのプロパティの値が示すファイルにイベントのログが記録されます。LOGEVENTS がオンの場合にこのプロパティを設定しないとそのデフォルト値が PER_MACHINE_FOLDER をパスとして Log.LiveUpdate に設定されます。ファイルはセッションごとに上書きされます。
INTERNET_CONNECTION	RAS (Remote Access Server の略) の特性を決定します。値は数値 (DWORD) です。値が 0 の場合には IE 設定に従います。たとえば、IE が RAS を使う設定であれば RAS を使います。値が 2 の場合には RAS 設定で指定した LiveUpdate 専用の設定にサイレントにダイヤルします。
UIRUNONCE	初めてユーザーインターフェースを実行するときにユーザーは RAS とプロキシの接続設定を表示できます。接続設定ウィンドウを再表示するにはこの値を 0 に設定します。
CORPORATE_MODE	LuAdmin 環境が検出されると Corporate モードの環境設定が指定されます。CORPORATE_MODE の文字列が存在して空以外の値に設定されている場合には Corporate モードが示されます。この文字列が存在しないか空の値に設定されている場合には Corporate モードは使いません。Corporate モードが該当するのは LAN HAL が存在する場合またはシマンテック社以外のホストエントリが存在する場合です。これらの 2 つの条件を示す個別の設定があり、代わりにその設定を使うことがあります。この時点でこれらの条件が 1 つでも真であれば Corporate モードが自動的に設定されます。これによって URL=Tri エントリのプロパティに従うべきかどうかを決定します。Corporate モードであれば CORPORATE_ALLOWED_URL_HOSTS がアクティブな場合を除いてこのプロパティに従いません。

表 5-1 Settings.LiveUpdate の設定

設定	説明
CORPORATE_ALLOWED_URL_HOSTS	Corporate モードがアクティブな場合に URL ホストが接続できるかどうかを設定します。LAN、HTTP、FTP の文字列の 1 つ以上を指定できます。複数の文字列を指定する場合にはカンマで区切ります。
SELECTEDRAS	RAS_USE_IE_RAS が存在して空以外の値に設定されている場合にはカスタム RAS 設定は無視されます。RAS_USE_IE_RAS が存在しないか空の値に設定されている場合には RAS_SELECTEDRAS が示すカスタム RAS 設定を使います。
USERNAME PASSWORD	特定の RAS のユーザー名とパスワードのプロパティ名を PREFERENCES¥RAS¥<RAS 名>¥USERNAME:ENC と PREFERENCES¥RAS¥<RAS 名>¥PASSWORD:ENC で作成する必要があります。<RAS 名> はユーザー名とパスワードを適用する RAS エントリを説明する名前を表します。
USE_HTTP_PROXY USE_FTP_PROXY	設定するとプロキシをアクティブにできます。
USE_IE_PROXY	IEコントロールパネルで指定したプロキシ設定があれば USE_IE_PROXY により LiveUpdate がその設定を使います。これは新規コンピュータでのデフォルトです。
AUTHORIZATION	PREFERENCES¥PROXY¥AUTHORIZATION 設定の値は FTP 転送の InternetOpenUrl() 要求で送信される HTTP プロキシ認定ヘッダーで使います。プロキシ認定ヘッダーは proxy-authorization: scheme login:password という書式です。scheme は Basic、NTLM などで login:password は UUEncoded です。
HTTPAUTHORIZATION	PREFERENCES¥PROXY¥HTTPAUTHORIZATION は HTTP プロキシ認定ヘッダーを除いて PREFERENCES¥PROXY¥AUTHORIZATION と同様に使います。
HOSTS	ホストファイル情報です。
NUM_HOSTS	登録するホストエントリの数を示します。
NAME	表示目的に使い、接続をどのホストに試みているかを示します。

表 5-1 Settings.LiveUpdate の設定

設定	説明
TYPE	FTP、HTTP、LAN のいずれかです。モデムはサポートされなくなったのでモデムエントリは無視されます。
ACCESS	通常は URL でプロトコル指定より後の部分を示します。たとえば、完全修飾 URL が ftp://update.symantec.com/liveupdate の FTP ホストの場合には Access プロパティの値は update.symantec.com/liveupdate になり、Access2 プロパティの値は ftp://update.symantec.com/liveupdate になります。
ACCESS2	常にホストの完全修飾 URL を示します。
LOGIN:ENC PASSWORD:ENC	接続に使うログインとパスワードがあればそれを示します。
SUBNETSUBNETMASK	ホストを選択するときは現在の IP アドレスがサブネットマスクでマスクされ、その結果が現在のホストエントリのサブネットプロパティの値と比較されます。一致した場合にはそのホストを使います。一致しない場合にはそのホストをスキップします。サブネットとサブネットマスクを両方とも 0 の値にするとどの IP アドレスとも必ず一致します。
IS_SYMANTEC	シマンテック社のサーバーかどうかを決定します。LuAdmin でパスワードを表示すべきかどうかを決定する場合に最も重要です。
HOST_NUMBER	ホストの識別子です。

メモ: LAN HAL (S32luhl1.dll) は UNC パスを使う特定の場所から LiveUpdate がファイルを取り込むための古いファイル転送方法です。NT のワークステーションとサーバー用にはこの方法を使わないでください。Norton プログラムスケジューラを使う場合、すべてのユーザーがアクセスの権限を確認できる NT サーバー上の共有リソース (NULL シェア) に LiveUpdate ファイルがない限り LiveUpdate は UNC パスに接続できません。

Corporate モードの設定について

LiveUpdate 1.6以降を次の条件のいずれかを満たすコンピュータにインストールすると Corporate モードという状態がアクティブになります。

- カスタムホストファイル (Liveupdt.hst) がコンピュータ上の LiveUpdate プログラムファイルの場所で検出された
- 1.6 より前のバージョンの LiveUpdate で使っていた LAN HAL (S32luhl1.dll) が LiveUpdate プログラムファイルの場所に存在する

Corporate モードでは LiveUpdate の動作が2つの点で変化します。第1に、ファイルをダウンロードするときに TRI ファイルの URL=行を使おうとしません。これによりダウンロード時に LiveUpdate がファイアウォールの通過を試みる可能性がなくなります。この設定を変更するには Settings.LiveUpdate ファイルの CORPORATE_ALLOWED_URL_HOSTS 設定を変更します。次に例を示します。

CORPORATE_ALLOWED_URL_HOSTS=HTTP

第2に、社内のエントリが失敗した場合に LiveUpdate はシマンテック社のホストへの接続の試みを続行しません。この動作を変更して (サーバー障害のときなどに) すべてのホストへのアクセスを許可するには次の設定を Settings.LiveUpdate ファイルに追加します。

ALL_TRANSPORTS_AVAILABLE=YES

この値を指定すると LiveUpdate は最初のホストエントリへの接続の試みを続行しますが、接続に失敗した場合にはインターネット接続経由でシマンテック社のサーバーに接続します。これは企業の LiveUpdate サーバーが常に利用可能とは限らない環境で役立ちます。

LiveUpdate 1.7 パッケージの認証について

LiveUpdate 1.6x と 1.7 は LiveUpdate の内容をユーザーに配信する前にファイルの署名を調べることでダウンロード処理を保全します。さらに LiveUpdate 1.7 はダウンロードしたパッケージを保全しクライアント、サーバー、ゲートウェイのそれぞれに対して認証します。

新しい更新ファイルごとに暗号署名が添付されており、シマンテック社の保全サーバー上に格納されている専用キーを使ってこれに署名します。結果のデジタル署名は署名ファイルに格納され、署名ファイルはカタログファイルとともに Livetri.zip ファイルに圧縮されます。

認証検査のいずれかに失敗した場合には説明のエラーメッセージが表示され、活動がログファイルに記録されます。Windows NT コンピュータではエラーは NT イベントログにも書き込まれます。

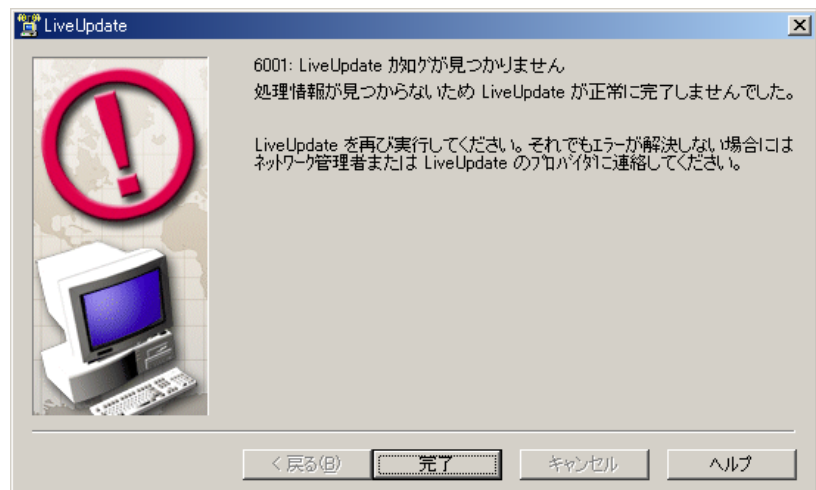
認証できないLiveUpdateパッケージをダウンロードした場合またはより新しい更新ファイルが利用可能になったときに複製エラーが起きた場合、[図 5-2](#) のエラーメッセージが表示されます。この場合、LiveUpdate の再実行の前に 1 時間から 2 時間待つ必要があります。

図 5-2 パッケージの認証エラー



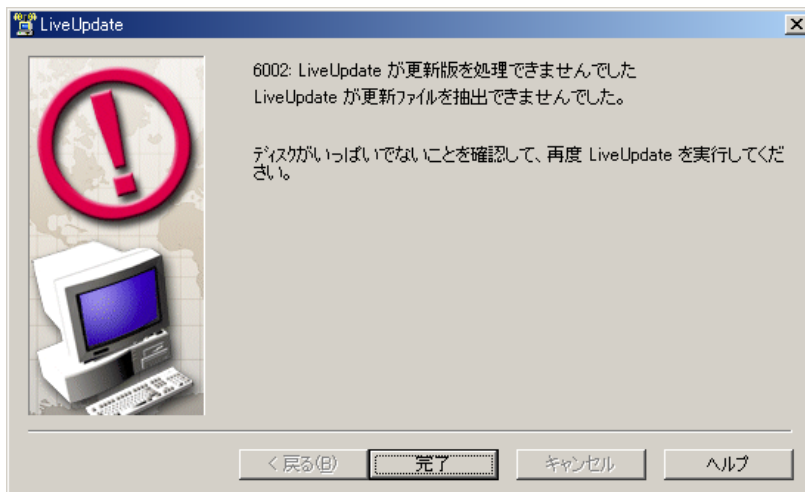
TRI ファイルを認証できない場合には[図 5-3](#) のエラーメッセージが表示されます。

図 5-3 TRI ファイルの認証エラー



LiveUpdateが壊れたカタログファイルをダウンロードした場合には図5-4のエラーメッセージが表示されます。ハードディスクが一杯になっていないことを確認してください。一杯になっていなければダウンロード時にLiveUpdate サーバーが更新された可能性があります。1 時間待ってからLiveUpdate を再実行してください。

図 5-4 壊れたカタログファイルのエラー



英字

- ACCESS 5-9
- ACCESS2 5-9
- ALL TRANSPORTS AVAILABLE 5-6
- AUTHORIZATION 5-8
- CORPORATE_ALLOWED_URL_HOSTS 5-8
- CORPORATE_MODE 5-7
- Corporate モードの設定 5-10
- DOWNLOADS 5-5
- FTP
 - ホストファイルの作成 3-2
- Grc.dat ファイルの生成 4-2
- HOST_NUMBER 5-9
- HOSTS 5-8
- HTTP
 - ホストファイルの作成 3-3
- HTTPAUTHORIZATION 5-8
- INSTALL_FOLDER 5-3
- INTERNET CONNECTION 5-7
- IS_SYMANTEC 5-9
- LAN_HAL_PRESENT 5-6
- LiveUpdate 1-1
 - UNC サポートの実装 3-6
 - アップグレード 1-8
 - イントラネットサーバーの
セットアップ 1-9
 - カスタムパッケージの使い方 3-10
 - クライアントワークステーション用
ホストファイルの作成 3-1
 - コマンドラインまたは
スケジューラからの実行 4-5
 - 働き 1-2
 - パッケージの認証 5-10
- LiveUpdate 管理ユーティリティ
 - LiveUpdate クライアントとの互換性 1-8
 - SSC での使い方 4-1
 - イベントのログ記録 3-12
 - インストールと実行 2-1
 - 更新 3-9
 - 使い方 3-1
 - トラブルシューティング 5-1
 - 働き 1-5
 - ファイル 1-6
- LiveUpdate クライアント
 - 関係するファイル 1-3
 - 関係するファイルの場所 1-4
 - 更新 3-10
 - 設定ファイル 1-5、5-1
- Liveupdt.hst 5-10
- Log.LiveUpdate 1-5、5-2
- LOG_BACKUPCOUNT 5-6
- LOG_FILE_NAME 5-7
- LOGEVENTS 5-6
- LOGIN:ENC 5-9
- MERGE_FILE_LOCATION 5-3
- MERGE_FILE_NO_DELETE 5-3
- NAME 5-8
- NEW_HOSTS_LOCATION 5-4
- NEW_HOSTS_NO_DELETE 5-4
- NON_SYMANTEC_HOST 5-6
- NUM_HOSTS 5-8
- PASSWORD 5-8
- PASSWORD:ENC 5-9
- PER_MACHINE_FOLDER 5-4
- PER_USER_FOLDER 5-4
- PER_USER_ROAMING_FOLDER 5-4
- PREFERENCES 5-5
- Product.Catalog.LiveUpdate 1-5、5-2
- PRODUCT_CATALOG_BACKUPCOUNT 5-6
- PRODUCT_CATALOG_FILE 5-4
- README.TXT 1-4、1-7
- SELECTEDRAS 5-8
- Settings.LiveUpdate 1-5、5-3
- SETTINGS_FILE 5-3
- SETTINGS_FILE_BACKUPCOUNT 5-7
- SSC
 - LiveUpdate 管理ユーティリティの
使い方 4-1
 - NetWare サーバーの設定 4-3

クライアント更新の
有効化とスケジュール設定 4-2
ホストファイルの設定 4-1

SUBNETSUBNETMASK 5-9

TCP/IP

所在地による有効化 3-7

TYPE 5-9

UIRUNONCE 5-7

UNC サポート

実装 3-6

設定 3-5

UNC フォルダ

ホストファイルの作成 3-4

USE_FTP_PROXY 5-8

USE_HTTP_PROXY 5-8

USE_IE_PROXY 5-8

USEPASSIVEFTPMODE 5-5

USERNAME 5-8

WORKINGDIRECTORY 5-5

あ行

アップグレード

LiveUpdate 1-8

イベントログ 3-12

インストール

LiveUpdate 管理ユーティリティ 2-1

イントラネットサーバーのセットアップ 1-9

か行

カスタム LiveUpdate パッケージの使い方 3-10

管理外クライアント

ホストファイルの設定 4-4

クライアント

互換性 1-8

設定ファイル 1-5、5-1

ワークステーション用 LiveUpdate

ホストファイルの作成 3-1

クライアントに関係するファイル

LiveUpdate 1-3

場所 1-4

クライアントの更新

SSC からの有効化とスケジュール設定 4-2

更新

LiveUpdate 管理ユーティリティ 3-9

LiveUpdate 管理ユーティリティのサイレント

実行によるパッケージの取り込み 3-9

LiveUpdate クライアント 3-10

取り込み処理 2-2

パッケージの取り込み 2-4

さ行

サイレント実行

更新パッケージの取り込み 3-9

コマンドラインまたはスケジューラからの

実行 4-5

スケジューラ

LiveUpdate の実行 4-5

接続オプション

すべて利用可能にする設定 3-8

設定

Corporate モード 5-10

LiveUpdate の UNC サポート

(LAN 転送) 3-5

SSC からの NetWare サーバーの設定 4-3

SSC で使うための

ホストファイルの設定 4-1

管理外クライアントのための

ホストファイルの設定 4-4

た行

ダウンロード

LiveUpdate データ 5-2

中断 2-4

フォルダ 5-2

ダウンロードオプションの設定 2-2

中断したダウンロードの処理 2-4

トラブルシューティング

LiveUpdate 管理ユーティリティ 5-1

な行

認証 (LiveUpdate 1.7 パッケージ) 5-10

は行

パッケージの認証 (LiveUpdate 1.7) 5-10
ファイル

LiveUpdate 管理ユーティリティ 1-6

LiveUpdate クライアントに

関係するファイル 1-3

クライアントの設定 1-5、5-1

ホスト設定 3-7

ホストの種類

FTP **3-2**HTTP **3-2**LAN **3-2**

ホストファイル

FTP 用の作成 **3-2**HTTP 用の作成 **3-3**UNC フォルダ用の作成 **3-4**管理外クライアントのための設定 **4-4**クライアントワークステーション用の
作成 **3-1**

や行

有効化

所在地による TCP/IP **3-7**

ら行

ログファイル **3-12**

